

## 私のインタビュー

高峰 秀子

新潮社、2012年(初版1957年)

写真は amazon



本を読む機会は少なくないつもりだが、ほんとうに面白い本は年に10冊もあればいいところで、厳選して読んでも、その確率はおそらく数十冊に一冊といったところだろう。

そうしたAクラスの本もこれまでは読んで終わりだったが、それでは勿体ないと考え、自分の心覚えも兼ねて、簡単にご紹介していこうと思います。

「私のインタビュー」は、女優として絶頂期にあった高峰秀子(1924-2010)が市井の女性を対象に行った12回のインタビューをまとめたものです。初版は1957年。もともとは雑誌「婦人公論」の1957年1月号から12月号まで1年間にわたって連載されたもので、12回のインタビューの対象者は次のとおりです。

①アメリカから帰った原爆乙女、②芸者さん、③「親探し運動」で再会した親子、④産児調節運動者、⑤希交会の女中さん、⑥灯台を守る人たち、⑦街の美容師さん、⑧撮影所の裏方さん、⑨セールスウーマン、⑩サーカスの女性たち、⑪ニコヨンさん、⑫日本を碧い眼でみる

このように多くは光の当たらない女性たちが対象になっていますが、これは雑誌社の要望で入った「撮影所の裏方さん」を除いて、高峰自身の意向によるそうです。インタビュー当時、高峰は30代前半、代表作といえる「二十四の瞳」(1954)、「浮雲」(1955)が直前に公開されていて、名実ともに日本映画界の第一人者の地位にありました。そのような大女優がこうした人々に対してインタビューを行うということは、現在ではかなり考えにくいことですが、おそらく当時もそうだったのではないのでしょうか。インタビューを受けた女性たちと高峰とは社会的地位が相当に隔たっていたはずですが、インタビューでは両者の垣根がほとんど感じられません。まずそのことがこの本を印象深いものにしています。

高峰は何故このような人選をしたのか。本書のまえがきでは次のように述べられています。

「私が映画界に入ったのは満で四歳、それからいくとしつきを経て女優生活はもはや

三十年になる。……自分には、個人の生活というものが全くといっていいほどなかった。……私は少しずつでも個人の私に女優の私をしたがえてゆけるようになりたいと希い、努力するようになった。……とにかくこの頃の私は女優生活を卒業して個人生活をより大切にしたいと思っているので、何でも手あたり次第に吸収してゆき、何よりも自分の眼でものを見ることに夢中である。……何も知らない井の中の蛙が、このインタビューでも映画以外の世界の職場の女性ばかりに登場願ったのもまたこのゆえんである。……」

高峰は後年、自伝である「わたしの渡世日記」という傑作（これも A クラスの本です）をものにしますが、この自伝を読んでおくと、「私のインタビュー」での高峰の発言の意味や価値がより良く分かります。

本書は 2 つの価値を持っています。一つはインタビューを受けた女性たちの発言による歴史的価値、もう一つはインタビューアである高峰の発言による人間高峰の価値です。もちろん、人間高峰の価値があるから 2012 年に再版されたわけですが、初版から 60 年近くたった現在では歴史的価値も相当に大きいでしょう。

以下では、高峰の発言から人間高峰の価値が窺えるものをいくつかピックアップしました。

私なんか全然立場が違いますけれども、こういう仕事をしておりますと、人が親切にしてくれても、それが自分が女優であるからということとか、それがほんとうに私自身に親切であるのか、そこのところをとて疑問持ちちゃうのですね。一生懸命つとめるのですけど、素直じゃなくなって来ちゃう。買いものにしても、とても高く売りつけられたり、とても安くまけてくれちゃったりする、嫌だなあと思う。何かそういう、普通じゃないということが耐えられませんね。（アメリカから帰った原爆乙女、pp25）

（清美さんに）私ね、十三くらいの時にお父さんとお母さんが別れちゃったのよ。それから一緒になってくれるかと思ってたけど、くれないの。だからいま、お母さん一人なの。あたなのほうがずっといいわ。羨ましいわよ。（清美さんの両親に）ちっちゃい時、そういうショックを受けると、いくら大きくなっても消えませんがね。そしてだんだん自分が育って行って、社会に出て行くでしょう。そうすると、なんか人間が信じられなくなっちゃうのね。人間不信みたいなものが、いつまでもついて回りますよ。だから十三、四の時が、一等大切なんですね。私なんか、その気持ちがいまだにありますね。だからお父さん、お母さんが、子供の気持ちを大切にしてくださいね……。それは私、子供さんを代表して言っときます。（「親探し運動」で再会した親子、pp60）

人間の本性はケチなんだから……。私だっていやですよ、高いものは。ときどき女中さんがはしりのものを買ってくることがあるんですよ。だから「私はこういうはしりは

食べたくないのよ。はしりではなくしゅんになったら買ってね」というの。ケチだからね、主人というものは（笑）。（希交会の女中さん、pp101）

私にファン・レターを下さる方がありますね。女学生もあり、中学生もあり、大学生もありでいろいろですけれども、中には家庭の奥さんで、ノートの切れはしみたいなものに書いて、十円の切手を買うのも楽じゃない身分の方らしいんですね、そういう方があなたのためにこれを貼って出しましたということがありありと分かる場合がありますね。そういう時は、とって嬉しいし、心からいい仕事をしなくてはと思いますね。そういう人がお小遣いをためて、ちょっとおかずを節約したりなんかして、たまに「じゃ映画をみましよう、映画をみるなら誰のをみよう」—それで自分の写真をみってくれる。そういうお客さまのための仕事を半分やっているようなものですね。それで自分もとても励まされるんです。（街の美容師さん、pp137）

実はね、いっちゃおうか、私はね、遠からず半永久的に女優のほうはやめるかもしれないの。そうしたら十六ミリのカメラを買って、松山（夫の松山善三氏）と二人で短編をコツコツ作ろうと思ってるの。そのときは御協力ねがえますでしょうか。（撮影所の裏方さん、pp162-163）

いろいろな映画がありますけれど、私は働いている人に見てもらえる映画にでたいと思うの。（ニコヨンさん、pp215）

本書は、一読で強烈な衝撃を与えるものではありませんが、静かな印象が長く持続する類のものです。類例がなかなか思いつかない、極めて個性的な本と言えるでしょう。

意見に係る部分は、筆者個人の見解です。

橋本 武（一般財団法人日本開発構想研究所・研究主幹）